航空ファン

THE KOKU-FAN

ワイドカラー
WIDE COLOU

三菱A6M3
零戦



☆特集☆

'71 11



米攻撃空母オリスカニの搭載機



グアム島のRA-3BとEP-3B

グアム島のアガナ海軍航空基地に翼を休めるRA-3Bスカイウォーリア偵察機（上）とEP-3Bオライオン電子偵察機。RA-3Bは第1艦隊偵察飛行隊(VQ-1)の所属機で，3色グレイの迷彩。下のEP-3Bは日本にもときどき姿を見せており，昨年の本誌12月号カラー・ページに載ったのも同じ機体





上 オリスカニーの甲板に並んだA-7B 後方の2機は第55攻撃飛行隊(VA-55)、手前の機体は第215攻撃飛行隊の所属機 (下) 第153攻撃飛行隊(VA-153・写真左)のA-7Aと第155攻撃飛行隊のA-7Bの尾翼 両機ともそれぞれ飛行隊の指揮官機である







〔上〕同じくオリスカニに配属されている第191戦闘飛行隊(VF-191)の F-8 クルーセイダー。このF-8Jはシリアルから[illegible]3月24日、横須賀沖の[illegible]で墜落した機体と思われる。
〔下〕オリスカニに5機積まれているEKA-3B 第130電子偵察飛行隊(VAQ-130)の所属機。このページの2機は厚木基地で撮影





（上）フランス空軍のミラージュⅢE戦闘機 ⅢEは核兵器も搭載できる地上攻撃機で 1961年4月1日1号機が完成して以来 450機の量産が行なわれており、現在ミラージュⅢAとともにフランス空軍の核兵力の一翼を形成している 写真の機体は胴体下にAS 30マーテル空対地ミサイルを吊して飛行中
（下）西ドイツ空軍に新しく配属されたRF-4Eファントム II偵察機 手前の機体は機首に"スピリット オブ セントルイス"の文字を書いている





(上・下) これも西ドイツ空軍の新鋭偵察機RF-4E 同空軍で88機を装備することになっている。1号機は昨年11月に納入され、現在すでに最初の部隊 第51偵察航空団が編成されている。写真はすべて同部隊に納入されたもので、マンガの部隊マークが面白い





1 USカップ・エアレースの出場機

ミス アメリカ の文字を書いた [illegible] のきらびやかな塗装のP-51 [illegible]
のレース ナンバーをつけて出場 [illegible] 位となった




6



「上」これはめずらしいルーマニア空軍のMiG21D 同空軍は約250機の航空機を装備しているが 写真のMiG21Dは MiG19とともに 迎撃部隊の主力である。
「下」イタリア空軍のアエリタリア（旧フィアット）G91Y攻撃 戦闘機 G91Y型はG91を発展した高性能型で 爆撃能力は40%も向上している イタリア空軍では第一次発注分20機のほかに 55機の追加発注も決めて る





(上) ホーカー・シドレー・トライデント3B　トライデント3BはBEA向けの機体で，1Eの胴体を約5m延長して，乗客[illegible]人乗り([illegible]人乗り)としたもの。BEAでは26機を発注しており，写真はその1号機。今年から同社の路線に登場している

(下) 昨年5月に初飛行して以来，テスト飛行をつづけているアエリタリアG222輸送機。イタリア空軍では旧機種を[illegible]とくなっているが，アエリタリアでは今年5月末のパリー・ショーにも展示して，海外の空軍にも大いにPRしている









(上) ホーカー・シドレーHS 125の最新型シリーズ400。400はキャビンや機体外部が改善されて洗れんされたものになっている。バイパー522ターボジェット・エンジン(1,525kgst)双発のビジネス・ジェットで、乗客は11人乗り。すでに22カ国から240機の発注があり、すでに40機が引渡されている。

(下) これはカリフォルニア州のブラウン・フィールドで行なわれたUSカップ・エアレースの出場機P-63の機体をスピード競技用に改造したもので、翼端を切り込み、操縦席も低くしている。レースではエンジン故障のため飛行はしなかった。





〔上・下〕同じく USカップ の旧編機で 上は22のレースナンバーを付けて飛行中のF4U コルセア。B アカーが操縦して5位となった。下は 特別出場 のTBM 3Eアベンジャー。B フォークマーの操縦でコースを3周したのみで棄権したが そののんびりした飛行ぶりで 観衆を大いに楽しませた。





上 下 機首を黒く塗したレース [illegible] ト 38 [illegible] 写真 [illegible]
[illegible] スピードを [illegible]



1 A PLANE FIGURE
② K 61 I FLOWN BY COMMANDER KOBAYASHI OF 244TH F GR
③ Ki-61 I FLOWN BY SERGEANT TABATA OF 39TH ARMY TRAINING GROUP
④ Ki 61 I 37TH F GR

① 平面塗装例
② キ-61 I 飛行第244戦隊 林隊長機
③ キ-61 I 第39教育飛行隊田畑軍曹機
④ キ-61 I 飛行第37戦隊所属機

1


2


③


④


川崎 キ-61-1改 "飛燕"

KAWASAKI キ-61 1Kai "HIEN"

第2次大戦を通じ日本の戦闘機のなかで唯一の液冷エンジンを装備した戦闘機で、ダイムラー・ベンツDB601発動機を国産化したハ40発動機を装備していたため、メッサーシュミットMe109のコピーなどといわれたが、純然たる国産開発の機体である。昭和18年12月完成し、キ61-1型は、その後改良型を含め約3,000機が生産されて各地で転戦した。戦争末期、B-29の迎撃に活躍したことはよく知られている。

This airplane was the only liquid cooled fighter in Japan during WWII. Because the engine, an "HA 40" was a domestically produced German DB601, this aircraft was called a copy of the Messerschmitt Me 109. However it was actually a domestically developed model. It is well known that this model was especially active in intercepting B-29s in the later stages of the war.

キットについて

総生産機数中キ61-1型は2,700機以上にあたり、塗装やマーキングのバリエーションも多い機体は一型といってよい。プラモデルとしては2型改が多いが、1型のキットはレベル1/72シリーズのものが唯一のもので、貴重な存在。シャープなモールドで楽しめるキットである。

KIT

Of all the planes, more than 2,700 were model 1 (KI 61 I); therefore, the model 1 has more painting and marking variations. As for the plastic plane kit, the model 2 (KI 61 2) is most popular. The remodeled KI 61 I in the Revell 1/72 series is therefore very valuable in that it is the only full dress remodeled model 1 kit. It is a privilege granted only to Revell kit fans to enjoy this expertly molded craft.

塗装について

図1 中国大陸戦線で無塗装の地の上に日本陸軍ダークグリーン(⑯)のメカノロ迷彩がある。迷彩のパターンは一定せず図のような縞状したものや、まんだら状、石垣状のものなどがある。主翼の前縁の味方識別塗装はオレンジ・イエロー(④+③)

図2 第2次大戦中の日本機中、もっとも派手なマーキングの機体として有名な第244飛行戦隊の小林隊長機で、全面シルバー(⑧)の地色で機体の上・側面ダークグリーン(⑯)のメカノロ迷彩。胴体にオレンジ・イエロー(④+③)の帯とレッド(③)の帯があり、スピナは朱赤(③+①)。胴体の縦帯と垂直尾翼はレッド(③)

図3 第39教育飛行隊の所属機で、機体の上・側面はオリーブドラブのようなダークグリーン、下面はシルバー(⑧)の塗装。キャノピ左下の撃墜マークは赤で、大型機撃墜マークはB-29の平面図を図案化した赤の模様となっている。

図4 第37飛行戦隊機で全面シルバー(⑧)、垂直尾翼にだけはんてん迷彩があり、部隊マークは白フチ付き。

また主脚カバーには番号が記入されていて、図2の機体は295、図3は[illegible]、図4は05の数字が黒で記入されている。機首の反射防止はいずれも㉝のつや消し黒。プロペラ・ブレードは㊶赤褐色で先端にオレンジ・イエロー。機体内部は金属地の上へクリヤーブルーグリーンの塗装。(K. Hashimoto)

PAINTING

Fig 1 With a dazzle camouflage of the Japanese Army dark green (Revell Color 16) directly on the basic metal, this presents a good example of plane painting. There is no fixed pattern in the camouflage: some in the meandering shaped camouflage as seen in the figure, and some in the spotted and/or in the assembled polygon shaped camouflage. Orange yellow (RC 4 plus RC 3) on the front edge of the main wings is the color for discriminating a friendly plane from an enemy plane.

Fig 2 This is Commander Kobayashi's plane of the 244th Fighter Group, known as the most colorful marking plane of the Japanese aircraft during the WWII. It is wholly grounded with RC 8 silver. On this silver basis is a dazzle camouflage of dark green (RC 16) on the top and sides of the plane. It has a belt of RC 4 plus RC 3 orange yellow and a belt of RC 3 red on the fuselage. The spinner is RC 3 plus RC 1 vermilion red. The vertical belt on the fuselage and the tail fin are RC 3 red.

Fig 3 This is the plane belonged to the 39th Army Training Group. The top and sides of the plane are dark green which looks like olive drab. The bottom surface is RC 8 silver. The exploit mark left hand below the canopy is red. A red line drawing of B-29 in a plan figure is the exploit mark showing that it "shot down" a large aircraft.

Fig 4 This was the plane belonged to the 37th Fighter Group. Totally grounded with RC 8 silver except for the tail fin which had a dotted camouflage. The unit mark is hemmed with white.

Also note the figures given on the gear cover: "295" for the plane of Fig 2, "21" for Fig 3 and "05" in black for Fig 4. The light shade on the nose is RC 33 frosted black for all planes. Propeller blades are RC 41 dark red brown with an orange yellow line on the edges. The interior is painted clear blue green on the metal basis.

(K. Hashimoto)

キ61-1データ(Ki-61 technical data)
乗員1名 crew 1 諸元 dimensions 全幅(span) 12.00m 全長(length) 8.94m 全高(height) 3.70m 全備重量(gross weight) 3,470kg 発動機(power plant) ハ40(1,175HP)×1基 最大速度(max speed) 580km/h 実用上昇限度(service ceiling) 10,000m 航続距離(最大)(range) 1,800km 武装(armament) 20mm×2 12.7×2 爆弾(bomb) 100~250kg×2

模型の塗装に必要なレベル・カラー

①ホワイト	③レッド
④イエロー	⑧シルバー
⑯暗緑色	㉝黒鉄色
[illegible]フラットベース	㊶レッドブラウン
[illegible]クリヤーイエロー	㊿クリヤーブルー



3式戦闘機"飛燕"I型。 飛燕 I型の美しいシルエット 胴体は細長くとがって いる 上面は陸軍規格の暗緑色 下面が灰色の塗装 尾部の白帯は本土防空部隊所属をあらわす この写真は 同機が不時着した静岡県の大井海軍基地で撮られたもの

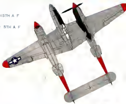


川崎3式戦闘機"飛燕"2型

1964年に在日米空軍の協力で復元され　日本側に返還されたおなじみの"飛燕"2型。現在は航空自衛隊で保管しており、日本各地の航空関係のショーに展示されて　ファンを楽しませている

①② P 38J 27TH F SQDN 1ST F GR 15TH A F
③ P 38J 8TH F GR 5TH A F
④ P 38J 433RD F SQDN 475TH F GR 5TH A F

① 第15空軍第1戦闘大隊第27戦闘中隊機
③ 第5空軍第8戦闘大隊所属機
④ 第5空軍第475戦闘大隊第433戦闘中隊機



2



3



4



ロッキード P-38J ライトニング

LOCKHEED P-38J LIGHTNING

1939年1月初飛行した米陸軍の高々度迎撃長距離戦闘機で「双胴の悪魔」の異名をもつ第2次大戦中でもっとも有名な戦闘機のひとつに数えられる。原型機XP-38から最終型のP-38M1まで様々な型があって合計9,923機という多量のP-38が生産され各戦場で活躍。太平洋戦線では連合艦隊司令長官山本五十六元帥の搭乗機を撃墜した戦闘機としてもよく知られている。

キット紹介

レベルの1/32シリーズ新製品（P-38J）のキットが登場。このシリーズ中最大のビッグスケールモデルで例によって精巧なコクピットとエンジンを内蔵しているが、可動部は実機的な車輪とプロペラのほかキャノピーの「ハッチ開閉式」になっている。各部のパーツもシャープで組立も容易になされており、1/32で簡単に組立てられ、しかもシャープな仕上りをする。デカールは有名な40機撃墜のエース、ボング少佐機と第5空軍第370戦闘グループ第485戦闘中隊機および第5空軍第475戦闘グループ第433戦闘中隊機の3機が附属。全面シルバーの機体と特殊な塗装であるブルーとシルバー塗装のほか、派手なインベイジョンストライプスなどでオリーブドラブ塗装機も作れる楽しみがある。キットの全幅49cm、全長36cmという大物であるため定価は1800円。例によって塗装説明図と大型カラー図が附属している。

塗装について

図1と2は第15空軍第1戦闘大隊第27戦闘中隊所属機で、機体は全面無塗装のシルバー。胴体後部とスピナおよびエンジンの空気取入口前端が明るいレッドの塗装。機首とエンジン部の光線反射よけはアンチグリアーグリーン（オリーブドラブ38で代用）。機首にはボインちゃんのマークつき。エンジン部はレッドで黒ふちつきの文字がある。胴体のナンバーとシリアルは黒。

図3 第5空軍第8戦闘大隊所属機で、機体の上側面がオリーブドラブ、下面はニュートラルグレー13の塗装。垂直尾翼にシリアルを消したラフなタッチの部分がオリーブドラブ38で入っている。垂直尾翼の上下はスカイブルー34で白色入り。主翼の国籍マークは図1と同じスタンダードタイプである。

図4 第5空軍第475戦闘大隊第433戦闘中隊機で、機体全面が無塗装のシルバー8。スピナ後部と胴体の帯およびナンバーはスカイブルー34。方向舵の縦線もスカイブルー。ナンバーは黒の片ふちつきで機首とエンジン部の光線反射よけはアンチグリアグリーンとなっている。プロペラブレードは図2、3、4とも黒つや消しで先端はクロームイエロー4、3。ハブは黒色。胴体の背にある排気タービン部は焼鉄色（黒鉄色28＋レッドブラウン41）。 (K. Hashimoto)

P-38J データ (P-38J specification data)

乗員1名(crew 1) 諸元(dimensions) 全幅(span)15.85m 全長(length)11.53m 全高(height)3.00m 全備重量(gross weight)9,800kg 発動機(power plant)アリソン(allison)V-1710-89/91 (1425HP)×2基 最大速度(max. speed)666km/h 実用上昇限度(service ceiling)13,400m 航続距離(range)4,200km 武装(armament)20mm×1 12.7mm×4。

KIT

The new P-38J model kit is making its appearance as the biggest kit in the Revell 1/32 series. Besides the precisely designed cockpit and engine, this kit's molding is far beyond that of ordinary kits. In addition to the movable wheels and propellers, the canopy hatch freely opens and closes. However, Revell still made it possible even for beginners to easily assemble this kit with its elaborately designed parts and splendid finish. Decals included are those of Maj Bong, an Ace who shot down 40 planes, the 485th Ftr Sq 370th Ftr Gp 9th Air Force and the 433rd Ftr Sq 475th Ftr Gp 5th Air Force. Model kit fans can enjoy many painting variations in the instructions, such as total silver, blue and silver, or olive drab with flashy invasion stripes. Fans will find that the ¥1800 price is not high considering the dimensions of this kit 49cm in width and 36cm in length. A large color picture and painting instructions are also included.

PAINTING

Figs. 1 and 2. The plane in these figures was that of the 27th Fighter Squadron of the 1st Combat Wing, the 15th Air Force. The plane is totally non-painting silver. Only the rear part of the fuselage, the spinner and the forehead of the engine's air intake are painted bright red. The nose and the light shade at the engine part are non-glare green (which can be substituted by Revell Color 38 olive drab). A seminude voluptuous beauty is marked on the nose while red letters brimmed in black are on the engine part. Numbers and serial signs are black.

Fig 3. This belonged to the 8th Combat Wing of the 5th Air Force. The top and sides of the plane are RC-12 olive drab. The lower surface is RC-13 neutral gray. On the tail fin is a rough painting line of RC-38 olive drab, which was apparently drawn to erase the serial numbers. The upper and lower parts of the tail fin are RC-34 sky blue with white belts. The nationality marks on the wings are of the standard type similar to those in Fig 1.

Fig 4. This belonged to the 433rd Squadron of the 475th Combat Wing, the 5th Air Force. The whole surface of the plane is based with non-painting RC-8 silver. The rear part of the spinner, the fuselage belt and the numbers are RC-34 sky blue. The vertical lines on the rudder are also sky blue. Numbers are black-brimmed. The nose and the light shade on the engine part are non-glare green. Propeller blades of all planes in Figs. 2, 3 and 4 are RC-33 frosted black and their edges are RC-4 and 3 chrome yellow. The exhaust turbine on the back of the fuselage is burned iron (RC-28 black iron plus RC-41 red brown).

(K. Hashimoto)

P-38Jの塗装に必要なレベルカラー	
3レッド	4イエロー
8シルバー	33オリーブトップ
13ニュートラルグレー	28黒鉄色
機体内部色	15黒つや消し
34スカイブルー	38オリーブトップ2
41レッドブラウン	30フラットベース



ロッキードP-38Lライトニング戦闘機。 パトロールで飛行中のP-38L 機体全部が銀色無塗装で 機首の反射よけはオリーブドラブ 垂直安定板とラジエターもオリーブドラブに塗り 白でコードレターを書いた珍らしい塗装の機体 第5空軍の第8戦闘大隊の所属機と思われる。

ロッキート　P-38　ライトニング

会4 7月15－18日　カリフォルニア州のブラウン　フイールドで開かれた "197　USカップ　エアレース" の出場機　米陸軍で使われていたライトニングの写真偵察型F5を改造したもの。レースではGレビノノが操縦して5位に入賞



カメラ訪問・グァム島の米軍基地

アガナ海軍航空基地





グアム島はマリアナ諸島中最大の島で、1898年米西戦争によりアメリカ領となってから第2次大戦まで米海軍の統治が続いていた。現在でも西太平洋唯一のポラリス潜水艦の基地を持ち、また極東アジアに展開する海軍および海兵航空部の中継地として、米海軍にとって地理上戦略上の重要な拠点となっている。

今年の7月[illegible]の地理上の有利さを見込んで、日本の厚木からVQ 1（第1艦隊偵察飛行隊）が移駐し、それまでアガナ海軍航空基地[illegible]たVAP 61（第61重写真偵察飛行隊）とVW 1（第1気象偵察飛行隊）の飛行隊を統合合併し、保有機種的にも米海軍最大の飛行隊を編成した。

またグアムには対潜哨戒を主任務とするFAW（艦隊航空隊）があり、米海軍で最初に編成されたFAW 1だったが、越南戦争の開始とともに分遣隊（FAW 1Det）を残して沖縄に移動した。

FAW 1は所属飛行隊を持たず米本国から6ヵ月交代でP 3オライオンの飛行隊が配属され、アガナの分遣隊にも1飛行隊配属されるが、現在はカリフォルニア州モフェット・フィールドから派遣されているVP 40（第40哨戒飛行隊）から約3機がVP 40Detとして配置されているのみである。









[illegible] (Weisman) の [illegible] を施している。





①

①トランスパック（太平洋横断）の方の主役だったVMA（AW）[illegible]のA-6A。[illegible]



⑨

[illegible]

⑨アガナ基地所属のHU 1型アルバトロス。他に2機配属されており捜索・救難に活躍している。



⑩





…EC-121の輸送機。…は…と…ランク（不時着水）にそなえている…

⑫VQ-3のEC-130G。EC-130Gは太平洋艦隊のポラリス潜水艦をはじめいかなる艦艇の通信をも世界中に伝えることである通信中継機で TACAMOⅡという電子装置を搭載している。⑬がそのアンテナで…の部分は…航行中…メートルもの長いアンテナにもなることできる。

⑭はタッチアンドゴーをするEC-130G。TACAMOⅡのアンテナが外されているのは…のような訓練のときを…してアンテナをこわすことがあるためで、いずれにしてもこのアンテナのため、…機のフラップの角度は制限されている…





米攻撃空母



去る8月中旬横須賀に寄港した米攻撃空母CVA 34オリスカニーの艦載機。

ベトナム戦争も一段落し、現在第7艦隊に配備されている空母は、原子力のエンタープライズのほかCVA 41ミッドウエーと本艦オリスカニーの3隻だけである。今回の寄港は10年ぶりの寄港であった





今回オリスカニーに搭載されて来日した航空部隊は、第215、195、153の三つのA7コルセアII攻撃飛行隊（VA 215、195、153）とF8Jクルーセイダー部隊の第191、194戦闘飛行隊（VF 191、194）を主力、そのほかRF 8Gの第63偵察飛行隊（VFP 63）、EKA 3Bを装備した第130電子偵察飛行隊（VAQ 130）それに第111早期警戒飛行隊（VAW 111）のE 1Bトレーサー、第1支援ヘリコプター飛行隊（HC 1）のH 2Cシースプライトなども搭載されている

"オリスカニ"の搭載機





〔上と左ページ2枚〕第215攻撃飛行隊（VA 215）所属のA-7Bコルセア II。この部隊は今年からオリスカニー配属となった新しい部隊。機首に描かれた顔がユーモラスである。

〔このページ上と下〕胴体に500番台の数字を付けた第155攻撃飛行隊（VA 155）のA-7B。上の500番の機体はCVW-19の指揮官機である

〔右〕もう一つのコルセア部隊第153攻撃飛行隊（VA 153）のA-7A。この写真と左ページ中は厚木基地で撮影したもの ほかは横須賀のオリスカニ艦上である。







このページと次ページはすべて厚木基地で翼を休めるオリスカニの搭載機で　上は第191戦闘飛行隊（VF 191）のF8Jクルーセイダー



上　第194戦闘飛行隊（VF 194）のF8J　下　第63写真偵察飛行隊（VFP 63）所属のRF 8Gクルーセイダー　カラーでごらんのように色どりあざやかなマークが美し







〔右2枚と下〕第131電子偵察飛行隊（VAQ 131）のEKA-3Bスカイウォーリア。オーシャナには3機が配属されて給油任務、電子偵察の任についている。
ごらんのように胴体側面や垂直尾翼先端まで大小の出っ張りが見られ、これがみなレーダー。七つくらいのレーダーを搭載している。同機はまもなくEA-6Bイントルーダーと交代するが、こうして近くで公開されたのは初めて。写真右と下はエンジンを始動して発進するところ。前輪カバーのかたちが面白い









（上 左）第1戦闘支援ヘリコプタ飛行隊（HC 1）のUH 2Cシースプライト ヘリコプタ。左はオリスカニ号上を離艦するところ。同艦には6機が配属されている。



（右）EKA 3Bスカイウオリアの空中受油ブームカバーに描かれているVAQ 130のワッペン ドラゴン（紋）を図案化したもの



（下）厚木基地で撮影したVAW 111のE 1Bトレイサー早期警戒機



[illegible]機ニムロッドの翼下[illegible]

[illegible]テレビ誘導方式で使[illegible]テレビカメラ[illegible]



（中）[illegible]一度に24個も投下するオーストラリア空軍のC-130ハーキュリーズ。これまで輸送機からのコンテナ投下記録は英空軍機の22個であった。オーストラリア空軍のスコット中尉考案による新型投下ゲートによってこの大量投下に成功したもの。投下テストはオーストラリア、ニューサウスウェールズ州リッチモンド上空で行なわれた。

（下）ホーカー・シドレー748輸送機。1961年にデビューして以来、[illegible]まで[illegible]か国の[illegible]以上の航空会社で使われている中型ターボプロップ輸送機のベストセラー。





〔上〕S・A・I マルケッティSF 260。イタリアのエアロ・プランチ社が設計した曲技可能な練習機で3人乗り。エアラインのパイロット訓練用に使われているほか、軍用練習機としても、ベルギー、コンゴ、ザンビア、シンガポールの空軍に採用されている。全部の機体SF 260MXはそのうちの最新型で、原型は1964年7月に初飛行。すでに72機の注文を受けている。エンジンは260HPのライカミングO-540-E4A5。すでに100km周回コース上で360.48km/hr、1,000km周回コース上で326.52km/hrの、このクラスの世界速度記録を樹立している。

〔下〕世界でも有名なモーター・グライダーの一つのRF4D（単座）とその複座型のRF5。フランスのアルバビア社が造っていたのを1968年からそっくり西ドイツのスポルタビア社が受継いだもので、現在では月産10機から14機という量産が行なわれている。RF4Dのエンジンはフォルクスワーゲン1,200CCのものを改造した40HPのもので、空中停止は自在、174km/hrでゆっくり飛べ、6,000mまで上昇できるというから、普通のグライダーでは味わえぬ能力がある。







〔上　写〕オーストラリア政府のプロジェクトN機の最初で開発している双発ターボプロップの多用途機が去る8月7日　メルボルン近くの飛行場で初飛行した。

同機は時速220マイルで飛ぶSTOL機　すでにイギリスやカナダ　アメリカ　メキシコなどのユーザーからもひきあいがあるといわれるが　設計主任のアラン　ノーグレイ氏によると　1機約20万オーストラリアドルくらいになるという



〔上図〕横倉でしかも飛行が確認ない「ポータブル機」。オーストラリアのある技師が設計したもので　機体は車輪の方向転換と機のケトルだけという簡単なもの。上図はフライング　ウイング　で　これに胴体とエンジンがヘリコプタ式に吊り下げられているこの新型機　はたして成功するかどうか　その

IWATA

航空機から原子力まで

展示用模型

★豊富な経験と
新らしいアイデア！

★定評ある最高の技術！

岩田ソリッドモデル研究所

東京都練馬区豊玉中3の1 TEL(991)4676

ファントム
（ブルーエンジェルス）



縮尺　1/32模型

スナップ だより





（上）本年7月に横田基地に飛来したC-130E。尾翼に “PG” のテイル・レター、TAC（戦術航空軍団）のワッペンを付けている（昭島市 石田[illegible]）。
（中）これも8月下旬に横田基地で撮影したC-130K プロバイダー [illegible] の機体。[illegible] テイル・レターは付けていない [illegible] 最近 “[illegible]” レター機の飛来が多い（東久留米市・[illegible]）
（下）8月1日 エンジン・トラブルで伊丹空港に着陸したVC-[illegible] のDP [illegible] 同機は約2時間で修理を終え、厚木基地に帰った（豊中市 山根[illegible]）



（下）これはめずらしい塗装途中のDC-8。日本航空のJA8[illegible]で、尾翼のマークも半分しか[illegible]（東京都・内田[illegible]）。



TWELVE RARE VIEWS OF ZERO FIGHTER



未発表 零戦 写真集



（前ページ）富士山をバックに飛行中の零戦21型（A6M2）。冨嶋飛曹と先頭な零戦。塗装あがり頃の海軍航空隊を象徴する写真。尾翼に「オヒ」の記号を付けた大村航空隊の所属機である。
（下）エンジン整備中の零戦21型（A6M2）と32型（A6M3）。翼端を折りたたんだ状態に見られる機体の形状は32型で、…の機体のみは全面明灰白色、カウリングつや消しの黒の塗装で、ほかの機体は上面暗緑色、下面明灰白色である





(上)ブーゲンビルで作戦中の零戦(二二型)……離陸する1機は、尾翼の記号から第251航空隊の所属機と思われる。251空は昭和17年秋ラバウルに進出してガダルカナル攻防戦などに活躍しているが、この頃の零戦は劣勢ながらその活躍はめざましく、爆撃があっても、20分もすれば頭上をゆうゆうと飛んでいるのは零戦、敵機を撃墜までには至らした零戦であった





[illegible]と並んだ海軍航空隊の零戦 [illegible]（A6M2）左の6機 [illegible] 翼の後方に2機銃と垂直の尾翼に[illegible] [illegible]でき飛行機が一堂に会したスナップ [illegible]。尾翼の記号から美幌空所属の[illegible]航空隊の零戦と思われる

（下）整備中の零戦21型（A6M2） 中央の機体は訓練用に使われたもので、主翼下部 機体番号 181 をペンキ書きにより [illegible]下方の胴体尾部を外して 尾輪の支柱がむき出しになっている。大分航空隊の所属機。

[illegible]から見た零戦21型（A6M2）[illegible]の直線に身をつつんだ精かんな姿。[illegible] 主翼前縁 [illegible] [illegible]（下）をページ下と同じく大分航空隊の零戦21型 [illegible]。飛行作業前の一とき [illegible]からの指示を受け、まもなく零戦に乗って [illegible]時の飛行訓練風景のようすである。大分 [illegible] 主翼で基礎訓練を終え 陸上戦闘機操縦員 [illegible] 海軍からの搭乗 配属されて [illegible] が行なわれたところでもある















（左ページ上と上）増槽下：増槽を吊して飛行中の零戦32型（A6M3）。左ページの上 251航空隊の所属機のようであるが、ともに機体の塗装時のものと思われる。零戦の飛行中の姿は、[illegible]角度が[illegible]ちばん[illegible]んで美しい。（左ページ下）"起動タンク所"の零戦21型（A6M3）。すでにエンジンは始動しており、パイロットが乗り込んで[illegible]、[illegible]航空隊の1機。

（下）終戦とともに、中島飛行機の小泉工場で"[illegible]された零戦62型（A6M7）。63型は[illegible]エンジンを積んだ[illegible]胴体下[illegible]爆弾を[illegible]するようにしたもので、終戦の年の20年5月頃から[illegible]が行なわれている。写真の機体は、主尾翼の[illegible]が可能状態になっているの[illegible]。



U.S. カップ・エア・レース

1971 U.S. CUP AIR RACES





1周10マイルのコースを100周まわる1000マイル・レース "1971 ユナイテッド ステーツ カップ" ……8月……での3日間 カリフォルニア州サンジエゴのブラウン・フィールドで行なわれた

この種のエア・レースでは ネバダ州レノで毎年開かれている"ナショナル・チャンピオンシップ・レース"が有名だが U.S.カップでも アメリカで名だたるフライヤーたちが 13機の大戦中機に分乗して腕をきそった。結局10周を完全に飛んだのは8機であった

出場機はピストン・エンジンのプロペラ機ならどんなものでもOKとなっているが ほとんどが2次大戦の戦闘機を改修したもの レシプロ機のスピードと旋回性は 大戦の戦闘機で頂点に達していたという証拠 それだけ この種のレースは スピードとスリル そしてオールド・ファンの郷愁をさそう視角でもある

〔上〕ピット・エリアの参加機 右からベアキャット 2機のムスタング キングコブラ のうちキングコブラはエンジン・トラブルで棄権 〔左〕レース・ナンバー1を付けたムスタング 機上の人は レノのレースで連続3回優勝 69年にはF8F 2でレシプロ機の世界速度記録をたてたD・グリネマイア このレースでは3位であった 〔下〕レース登場、割引したボッブ・ラブのP 51D。同機はレース・ナンバー8を付けて出場 7位となった。

出場機の内訳はレー・フェリー ベアキャット コルセアが各2機 P 38が1機 それに6機のムスタングで 優勝はノー・フェリーのS.クーパーであった。





（下）レース・ナンバー11のP-51D, M本ーンの機体で カラー ページでおわかりのように [illegible] ス アメリカ" の優雅なニックネームを付けた美事な塗装の機体 [illegible] ースでは [illegible] 機の最下位でした。





[illegible] ラブ機体のP-51D [illegible] 離陸発進。







(上) 競技機体。ナンバー1パイロンをまわる左から P 38ライトニング P 51Dムスタング、F4U 4コルセアのかつての陸海軍の精鋭3機。3機が猛スピードで旋回する息づまる一瞬である。このP 38にはゲーリイ レビッツが搭乗して3位、P 51Dはレース ナンバー4のビル ジャクソンの機体だが 183周でまずに1位 F4U 4はムアカーが乗って6位。レースでは8本のパイロンが立てられ レース中はその内側に入らないことと最少1回のピット ストップをし 1ガロン以上の燃料を補給というのがルール。

(左 下)上の写真と同じくB ジャクリンのムスタング。







(上2枚) D グリネマイヤが乗って3位に入ったレース ナンバー1のP 51D(N332) ごらんのように地味な塗装だが 8機出場したムスタングの中では、もっとも良い成績であった。上の2枚目は ピット・ストップで撮影するところである。

(下) 塗装も海軍時代のものに忠実にしたこのTBM 3Eアベンジャー N33BM)は バロン フォークマーが乗って出場したが 別条かかって3周しただけでレースを中断、最下位となった。





このページ3枚とも同じ38のレースナンバーを付けたP-38ライトニング（N345）。陸軍航空軍で使っていたP-38Gの写真偵察機F-5を改造したもので、キャノピーとVスロップの開式が略表している位に入れ、実、偵察のP-38らしく、外板ははげしている、この写真でもよくわかる





この下側的3枚の写真で注意すきのことと思うが、左の機体では水平尾翼の下側の部分がはずされてみ、飛行中のにはちゃんと付けられている。これは当初はずしたままで飛行する予定であったが、P-38のテストパイロットであった大会役員のトニイ・レヴィエ氏の忠告で付けることになったものという。また飛行中の機体では、翼付根の吸気口のおおいもはずされている。フライヤーたちはスピードを出すためにあらゆる工夫をこらしている。

スピットファイアの戦闘記録（その3）



（上→下）F Mk Vが実戦部隊に配属されたのは1941年6月で、1年後の42年夏頃には59の中隊が同型を装備していた。写真の機体は20mmのイスパノ機関砲2門を装備したF Mk Vb。FLのコードレターを付けた第81中隊の所属機で、上は梯形編隊、下はV型編隊で飛行中。胴体のシリアルが白帯で塗りつぶされているものとそうでない機体がある。（全機）





〔上〕下方から見たF Mk Vb　機首下面の空気取入口、右翼下のラジエーター、左翼下のオイル・クーラー排気口、主脚の収納ぐあいなどがよくわかる。
〔下〕低空攻撃型のLF Mk Vb　LF型は低空でのエルロンの利きを良くするために、両翼端を2フィート4インチずつ切断し、切断部を木製フェアリングでうめたもの。1943年に入って、V型が戦闘爆撃機で使われている途中で改造された。写真はその1機で、第324連隊のIRグリート司令官の乗機

〔右ページ上〕〔中〕F Mk.Vbの1機で東インドの第92中隊の所属機。同中隊はV型を装備した最初の部隊であり1941年6月21日に9機を受領している
〔下〕F Mk Vaの1機で、エンジン始動中。20mm機関砲2門装備のVb型は、最高速度が19,000ftで360mph、7.7mm機銃8挺のVa型の371mphにくらべてやや劣った。低空攻撃型のLF Mk Vbは、最高速度が357mph/6,000ftであった。











〔上2枚〕いずれもF.Mk Vbで、アメリカ義勇兵のパイロットたちで編成していた第121イーグル中隊の所属機。同中隊はのちに米第8空軍の傘下に入って第4戦闘大隊を構成することになるが、イーグル中隊の頃はスピットを装備して、英本土での迎撃やドイツを攻撃する爆撃機の掩護に大いに活躍している。写真の機体は、風防下の胴体に Olga の文字を白く書いている。

〔下〕F.Mk Vbのラインアップ。アクリントンに駐留してイギリスの防空に活躍した第72中隊の所属機。





イギリスのインペリアル・エアウェイと合併して カンタス＝エンパイア・エアウェイと名称を変えたカンタスは、1934年12月10日よりオーストラリア―イギリス間の定期便を開設、翌年からはシンガポールへも乗り入れた。使用機は乗客10人乗りのDH86 4発機であったが、1938年7月よりは14人乗りのショート・エンパイア飛行艇（写真上）が導入されて、乗り心地は格段に向上した。この飛行艇の根拠地にはシドニー港が選ばれ、同港はカンタスの新しい"玄関"となった。

エアラインの翼

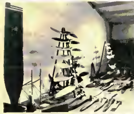
カンタス航空 ③



大戦中カンタスは軍の輸送に協力、隊員たちをニューギニアなどの前線へ運んだ。エンパイア飛行艇も空軍に動員されて哨戒飛行などの任につき、5機が失なわれている。写真上と下は戦後のカンタス機で〔上〕は一等旅のDC3。同機が同社のニューギニア路線に就航したものは、終戦翌年の1946年からである。〔下〕1949年から日本やシンガポール、ニュージーランドへの路線に投入されたDC4。





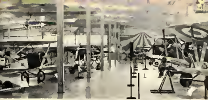


(上) ヒーデイ80 1試験機 コントラ式プロペラを機尾にプッシャー式に付け 主翼は境界層制御式の新しいもの。これで安くて実用的な自家用機にしようとした野心作 エンジンはキャビンのうしろに1個ある。

(左) プロペラも初期の木製2翅のものからターボプロップ輸送機のものまで数10枚ある

(下) グッドイヤー ダック水陸両用機 エンジンを胴体の上にのせ プッシャー式に推進して飛ぶ 主脚は翼のよこに完全に引込み 野心的な飛行機であったが 生産はされなかった。





〔上〕博物館のスナップ。まだ紹介しきれない珍らしい飛行機がこんなにぎっしりと展示されている。機体も展示も立派に整備されている。

〔右〕ウイスコンシン州空軍所属のF-86H戦闘機。同空軍の所轄機1機を申すり受けたもの

〔下〕ウイスコンシン州空軍所属だったF-89D戦闘機。双発の全天候機で、機首に強力なレーダを持ちロケット弾が武装。



